

第9章 公開授業「日々の暮らしと法律」と授業改善

吉田雅章（和歌山大学経済学部）

1. はじめに

筆者は、平成11年度、前期は経済学部夜間主コースの学生を対象として、後期は和歌山大学の全学部すなわち経済学部・教育学部・システム工学部の学生を対象として、「日々の暮らしと法律」を基礎教育科目の中の教養科目として開講した。開講日時は、前期分は木曜9・10限（17：30～19：00）、後期分は木曜7・8限（14：50～16：20）であった。そのうち、前期は6月24日に1回、後期は10月21日・11月4日・11月25日・12月9日の4回、計5回を公開授業とし、和歌山大学の全教員に参観を要請し、検討会において議論することにより、筆者自身ならびに大学全体の授業改善を図ることを試みた。以下においては、まず、公開授業実施のいきさつを述べる。

和歌山大学においては、平成9年末よりFDに取り組むことが論ぜられ、平成10年3月に和歌山大学FD研究会が創設され、平成11年4月からは同研究会を発展的に改組した和歌山大学FD推進委員会が発足し、これらを中心にFDが進められていった。その間、メディア教育開発センターや京都大学高等教育教授システム開発センターなどを訪問し、具体的にいかなる活動をすべきか検討した結果、京都大学の上記センターの田中毎実教授や石村雅雄助教授の勧めもあり、平成11年度に関しては同センターの「公開実験授業」を参考にした公開授業と検討会を和歌山大学でも実施することになった。

開講科目については、できれば全学共通の教養科目であることが望ましいという議論になり、担当者については、FD研究会とFD推進委員会のメンバーであり、京都大学の公開実験授業を20回以上参観している筆者ということになった。そこで、「日々の暮らしと法律」という開講期間半年の2単位の科目を、従前の一般教養科目に相当する基礎教育科目として臨時開設し、数回にわたり公開し、授業後の検討会は、京都大学の上記センターの先生方に参加いただき、FD座談会という形式をとることになった。また、公開授業と検討会の準備や事務に関しては、基礎教育科目ならびにFDを統括している学生部学生課に依頼することになった。

なお、筆者の従来の担当科目は、専門教育科目としては、民法総則、物権、債権総論、債権各論、家族法やPL法などであった。そして、基礎教育科目としては、私法を中心に法律の基本を解説する法学Ⅱを数回にわたり担当したことがあった。これらの科目を公開するということも考えたが、公開授業の参観者を増やすためにもタイトルや内容を一般向けにする必要があり、さらに、全学部の受講生にとって興味深い内容になるように、日常生活で遭遇するであろうような民法上の身近なトピックを中心に配列した「日々の暮らしと法律」という科目を創設することにしたのである。

公開授業を実施するにあたり、京都大学の公開実験授業の見様見真似で、講義案を作成した。それまで、受講生用のレジュメの作成はしたことがあるが、参観教員向けの講義案を作るとい

うのは初めての経験であった。その講義案の冒頭においては、「この公開授業は、授業改善のためのたたき台であって、模範授業ではない」ということを強調した。次に、その日の授業のテーマと受講生に特に伝えたい内容、そして、使用教材と進行予定などを明記した。講義の進め方に関しては、従来は頭の中で組み立てるだけであったが、これをほんの少し文章化するだけで、余裕を持って授業に臨むことができたように思われた。講義案を作成することは、小中高の教員ならば当然の事かもしれないが、大学教員が講義案を作成することは非常に少ないのではないかというのが公開授業後の検討会の議論であった。筆者にとって講義案を作成することだけでも授業改善になったのではないかとも思われるが、以下においては、公開授業を実施するにあたり授業改善につながったと考えるその他の諸々の点について言及する。

2. 「日々の暮らしと法律」の事前準備について

シラバスに記載した「日々の暮らしと法律」の「授業のねらい・概要」は次の通りである。

「われわれが日々の暮らしを送るに当たり、好むと好まざるとにかかわらず、法律と関わりを持たないことはない。従って、社会生活を営むために法律の知識は不可欠である。それにもかかわらず、法律は自分とは関係のない存在であるかのように考えられがちであり、さらに、暗くて近寄りがたいというような悪いイメージさえ持たれているといっても過言ではない。その原因として、法律用語の難解さ、法律学は無味乾燥であるというイメージ、法律解釈の理屈っぽさなどが考えられるが、この授業では、身近に存在する日々の暮らしの一場面を具体的な例として取り上げて、できるだけわかりやすく説明し、法律がどのように役に立っているか、そして、日常茶飯事でさえ法律抜きでは考えられないということなどを理解させることをねらいとしている。なお、できるだけ多くの法律を解説する予定であるが、最もわれわれの暮らしと密接な関係にあり、それゆえ特に力点を置くのは民法である。」

そして、シラバス作成時に予定していた「日々の暮らしと法律」の授業計画は、以下の通りである（実際の進行については後述する）。

「1 導入（授業の進め方、講義内容の紹介）」

- 2 われわれと法律の関わり
- 3 最も身近な法律としての民法
- 4 家族生活と法律Ⅰ（結婚と離婚）
- 5 家族生活と法律Ⅱ（親子関係）
- 6 家族生活と法律Ⅲ（相続問題）
- 7 商品売買と法律
- 8 住まいと法律
- 9 金銭貸借と法律
- 10 交通事故と損害賠償
- 11 製造物責任法（PL法）
- 12 日本の法システム
- 13 紛争解決のしくみ

14 法学の基礎 半年で計14回」

そして、受講生の成績評価の方法については、「毎回出席調査代わりの小テストを実施し、数回のレポート提出を課し、定期試験とで総合評価する。少なくとも3分の2以上の出席を必要とする」とシラバスに記載した。

さらに、履修上の注意・メッセージとして、「日々の暮らしと法律は、知識伝達型の授業であり、講義形式で行なう。できるだけ毎時間、遅刻しないで出席すること。テキスト・六法は必ず持参すること。なお、本講義は公開授業であり、本学および他大学の先生方の参観がある。アンケート調査やビデオ撮影等もあるのでそれを覚悟の上で受講すること」という文章をシラバスの最後に掲載し、公開授業である旨の注意を促し、受講予定者に対してその覚悟をした上で受講登録するように通知した。

3. 「日々の暮らしと法律」の実際の講義概要

和歌山大学の全学部生を対象とした後期の「日々の暮らしと法律」の受講登録者数は211で、実際の出席者数は10月から12月までは100～120で、1月・2月は80～90であった。

以下では、後期に開講した「日々の暮らしと法律」で、どのような講義をしたかを略述する。基本的に、できるだけ学生が興味を持つような内容と構成を心がけた。本講義の授業改善を図る上で最も力を注いだ点である。なお、前期も、順序は若干前後するが、内容的にはほぼ同様であった。

(第1回) 10月7日「導入」

公開授業であることを周知徹底し、ビデオ撮影や参観の先生の存在が嫌な者は受講しないように申し渡した。どのように授業を進めてゆくのか説明し、今後の講義内容についてテキストやシラバスを基に紹介した。ただし、この時点では、経済学部以外の学生のみが受講登録を済ませており、教育学部・システム工学部の学生は未登録であった。従って、「六法」もテキストも入手していない学生が大部分であり、この日以降に受講生は生協書籍部に発注しており、10月一杯はテキスト無しでもわかるようにレジュメを予定以上に詳細にせざるを得なかった。なお、「六法」に関しては比較的入手しやすいので、「書店に行ったが無かった」という抗弁は認めないと言明した。(テキストは、有斐閣の『サイエンス・オブ・ロー事始め』を指定したが、授業中に参照させるよりもレポート作成用に使用させることが多かったように思う。)

(第2回) 10月14日「われわれと法律との関わり」

いわゆる「六法」を説明し、書籍としての「六法」の目次を見ながら、わが国の代表的な法律を紹介し、学生も以前から知っているはずの刑法について少し詳しく中味を説明した。残念ながら、約半数の学生が「六法」を用意できなかった。さらに、テキスト持参者は3割強に過ぎなかった。

(第3回) 10月21日(公開授業)「自動車事故と損害賠償」

この回は、公開授業であり、アンケートによれば、受講生にとって最も内容的に役立つという回答が得られたので、少し詳しく紹介する。

まず、車の免許を取得する際に学習することであるが、民事責任・刑事責任・行政処分の相異について、そして特に民事責任の意義について詳細に説明した。次に、車を運転していて事故を起こしたら責任は免れないと一般に言われているが、それは責任を免れるための証明が極めて困難であり、その根拠である民法709条と自動車損害賠償保障法3条との相異について言及した。最後に、強制保険と任意保険の相異を説明し、強制保険は人身事故のみについて適用され、物損事故には適用されないため、損害賠償に対応するためには任意保険に加入しておく必要があり、とりわけSAPであれば安心できるから経済的に余裕があればこれに入っておくことが望ましいと解説した。

この時に撮影されたビデオを振り返ると、受講生が配布した資料を注視していた様子がうかがわれ、「日々のくらしと法律」の全授業の中で、受講生にとって最も身近で興味深い内容であったように思われる。

(第4回) 10月28日「最も身近な法律としての民法」

わが国にはさまざまな法律が存在するが、市民生活あるいは日常生活において最も関わり深いのが民法である。前回の交通事故、次回以降の家族・商品売買・住まい・金銭貸借など、身近なで重要な生活局面において登場するのが民法である。以上を、実際の条文を読みながら、わかりやすく説明した。

(第5回) 11月4日(公開授業)「家族生活と法律Ⅰ(結婚と離婚)」

結婚にも離婚にも種々の手続きが必要であり、その基本的なルールが民法に規定されている。結婚後の氏の問題や女性の待婚期間など、将来的には大きく様変わりする可能性のある条文も存在するが、現在の正式なルールを知っておくことも大事であり、この点を中心に説明した。授業の締めくくりに、「結婚には詐欺と錯誤がつきもので、離婚するのも人生における一つの選択である。また、結婚は人生最悪の選択であり、離婚は人生最良の選択であるとも言われている。ただし、結婚には莫大なエネルギーを必要とするが、離婚にはその3倍のエネルギーが必要であると言う人もいる。もっとも、夫婦であることを継続するのはさらに困難ではあろう」と言ったところ、授業後の検討会で、「既婚者であれば極めて興味深い内容であるが、大部分が未婚者である学生にとっては自動車事故ほど関心のある内容ではないだろう」と、参観教員から指摘された。

翌週、11月11日は、大学祭開催のため全学授業休止(休講とは異なる)であった。

(第6回) 11月18日「家族生活と法律Ⅱ」

前回の補足と、実親子関係・養親子関係、とりわけ戸籍届一般・嫡出・認知・特別養子・親権などについて説明した。また、公開授業の時を除いて(公開授業の時は受講生に小テストを実施しない代わりにレポート提出を求めた)、毎回授業の最後に小テストを実施したが、この時は、当日の復習としての問題に加えて、次回へのつなぎとしての相続に関する常識問題も出題した。

(第7回) 11月25日(公開授業)「家族生活と法律Ⅲ(相続問題)」

最初に、前回実施した小テストに関して優秀答案を示しながら解説を加えた。次に、今回の最重要ポイントである法定相続と遺言相続について、とりわけ、相続人と被相続人、相続権の喪失、相続の割合・法定相続分、相続の承認と放棄など、法定相続における基本的なルールを

説明した。その後、一般にはあまり知られていないが、非常に大事な概念である遺留分に言及した。最後に、時間的にあまり余裕が無かったので、相続税について簡単に触れた（後日補足した）。

（第8回）12月2日「商品売買と法律」

まず、売買契約の具体例として筆者の自家用車の売買契約書のコピーを配布した。固有名詞は省略したが、金額その他はもとのままにしておいた。書面には契約時にあまり説明されないが売り手に有利な条項も存在し、車に興味がある多くの受講生にとっては非常に参考になり、自動車事故と並んで好評な内容というアンケートの結果であった。次に、クーリング・オフの制度や、割賦販売法等を説明し、最後に、商品の故障をめぐって売り手との間でのトラブルについて、筆者自身の経験も披露し、内容証明郵便や調停・裁判についても言及した。

（第9回）12月9日（公開授業）「住まいと法律Ⅰ（不動産登記）」

まず、土地や建物の所有権を取得するためには必ずしも登記する必要はないが、登記するに越したことはない、但し、費用も相当かかるということを参考資料として有斐閣『小六法』記載の登録免許税額表を配布して言及した。次に、土地登記簿と建物登記簿の現物はどのようなものかということ、有斐閣の『目で見える民法教材』掲載のコピーを配布して理解させた。最後に、登記簿は100%信頼することはできないということを、関連する新聞記事を紹介して説明した。時間的に余裕があれば土地建物の賃貸借について触れる予定であったができなかった。

参観教員にとってはこの回の内容が最も実用であるという感想であったが、受講生には不動産取得はまだまだ先のことであり、その時に習いたいというアンケートの回答が多かった。

12月16日は、休講した。FD推進の立場からすれば、できるだけ休講はしない方が良いのであるが、やむを得ない事情があった。

（第10回）1月13日「抜き打ち試験」

当初は実施する予定ではなかったが、前回から1か月以上開いていたのと、今回初めて出席する学生が散見されたので、復習と受講生の引き締めを兼ねて実施した。すべて持込み可としたので、内容的には毎回出席していれば難なく書くことができるはずであり、出席回数の少ない者を不合格にし、そのことを自覚させる目的をも有する抜き打ち試験であった。

（第11回）1月20日「住まいと法律Ⅱ（土地建物の貸借、特に借地借家法）」

土地の貸し借りに関する法制を最初に概観した後、大学周辺のワンルームマンションを借りて生活している学生も結構いるので、建物の賃貸借に重点をおいて説明した。以前より感じていることであるが、法学部の学生ではないので、法律の条文をわかりやすく説明する手法よりも、具体例をあげて関心を持たせ徐々に法律に触れるという手法をとる方が効果的であった。

（第12回）1月27日「金銭貸借と法律（民法、利息制限法、出資法等）」

まず、劇画や映画の世界で登場する「トイチ（10日で1割の利息）」を具体例として掲げ、法律上の世界とアウトローの世界とを混同してはいけないと注意した。次に、高金利の制限を目的とする利息制限法やいわゆる出資法・貸金業法などの民事上および刑事上の法律を説明した。さらに、やくざまがいの取り立てに関する新聞記事を紹介し、当時マスコミをにぎわしていた商工ローンの問題にも言及した。

（第13回）2月3日「製造物責任法（メーカーの責任、証明責任その他）」

外国の有名メーカーが製造した自動車の欠陥に基づく損害賠償訴訟を紹介し、PL（製造物責任）への興味を喚起し、わが国でも学生が良く知っている事件が相当数存在することを説明した。その後で、製造物の欠陥に基づき損害を被った場合にどのように対処すればよいかという観点から、製造物責任法を概観した。さらに、同法は被害者の証明責任を軽減しているということを理解させるために、民法709条と自賠法3条にも言及した。

抜き打ち試験や小テストなどを毎時間実施したので成績評価の材料には事欠かなかったのであるが、定期試験を実施することにより受講生が復習をしてくれるものと考え、平成12年2月10日に、持込みは一切認めないで、下記のような定期試験を実施した。

「1 妻子がいるにもかかわらず、愛人のもとへ奔った資産家の男性が死亡し、全財産をその愛人に与える遺言を残した。この死亡した男性の妻子は、甘んじて、これを受け入れざるを得ないであろうか。妻子の側にできるだけ有利なようにするためには法律的にどのように判断すればよいか述べてよ。

2 詐欺やキャッチセールスとはいかなるものであるのか、具体的に例を挙げてわかりやすく説明し、さらに、それらに引っ掛かった場合、法的にどのように対処したらよいか述べてよ。

3 土地や建物を購入した場合、直ちに登記をすべきであるが、それを怠った場合、どのような不利益を被るおそれがあるのか、具体的にわかりやすく説明せよ。 以上3問」

現実の成績評価については、定期試験と、1月13日の抜き打ち試験、公開授業の時に課したレポート、公開授業時以外の授業時に実施した小テストを総合評価した。毎回出席でも試験等の出来が悪ければ不合格にすると受講生に通知していたが、毎回出席していた受講生の出来は極めて良好であり、毎回出席者を不合格にする必要はなかった。

4. 「日々の暮らしと法律」における授業改善について

上述したように、最も授業改善に努めた点は授業内容の工夫である。すなわち、授業内容を受講生の興味をそそるように努めたことである。第1に、できるだけ身近なテーマを選択したことである。ただし、アンケートや検討会の議論から、学生と参観教員とで、テーマの好みがかなり異なることがわかった。第2に、通俗的な内容も取り入れた。弁護士報酬・登記費用・相続税など、通常、大学の講義ではめったに取り上げられないことを説明した。とりわけ自動車に関する故障や事故を取り上げたことは、自由記述のアンケートによれば、受講生には非常に評判が良かった。第3に、具体的でわかりやすい教材を選択した。例えば有斐閣の『目で見える民法教材』で、これは従来からかなり評判の高い教材であり、「法学」や「法学概論」などの参考資料としてよく採用されると聞いている。第4に、小テストの工夫であり、その日のまとめとしての小テストと、次回へのつなぎとしての小テストの2種類を使い分けした。しかし、後者は、一般常識の範囲を超えるものではなかったが、一部の受講生にはやめてほしいと言われた。第5に、優秀な小テストを翌週に印刷して配布し若干の解説を加えた。これは、答案の模範的な書き方がわかったと受講生には好評であり、これで少しでも講義者と学生との双方向性を確保できたのではないかと考えている。

その他の授業改善としては、対象が法学部以外の学生であるので、抽象的な法律の条文解釈を少しでもわかりやすくするために、できるだけ具体的で身近な例を挙げて説明することを心がけた。

また、プレゼンテーションとしては、印刷物の配布が中心で、補助的に板書を利用し、OHPは使わなかった。OHPに関しては、教室が広すぎて最後部からは見えないし、暗くしなければならないので学生が眠る事態が生じると判断したからである。その代わり、可能な限り詳細でわかりやすいレジュメ・資料を印刷して配布するようにした。

また、前期の6月24日の公開授業はほぼ従来通りの体制で臨んだのであるが、記録を取る観点からは、極めて拙劣であった。すなわち、講義の様子は参観者の記憶のみで、検討会の録音もないため議事録も作成できなかった。そのため、10月中旬にはデジタルビデオカメラを購入し、大学院生に依頼して授業を撮影してもらった。このおかげで、他人では遠慮して指摘することのできない講義者の悪い癖がわかるという好結果があり、自分なりに聞きやすい話し方、見やすい板書などに留意したつもりである。検討会での参観教員の意見も参考にした。

5. 授業評価について

学生による授業評価は、平成10年度以前は、半期で1・2回、自由記述で実施していたが、公開授業実施に当たり、平成11年度の前期は3回、後期は毎時間実施し、特に後期は後述するように、メディア教育開発センターの通信研修「学生による授業評価実践」に参加し、授業改善を進める上で非常に参考になった。

前期の授業評価では、真面目な学生にとって問題のある授業のアンケートも集計してほしいと学長から要請があり、下記の「授業改善の立場から真面目な学生に嫌われること10選」を作成し、学内広報紙に掲載した。

- 「① 私語が多くて騒がしいのに注意をしてくれない
 ② 休講通知を出さないで休講をする（30分位待ちぼうけをする）
 ③ 休講が多過ぎる（オフィスアワーに行っても不在、大学に来ない）
 ④ 授業の開始が遅く、終了が早過ぎる（極端に授業時間が短い）
 ⑤ 授業終了のチャイムが鳴っても終わらず、次の授業に遅れる
 ⑥ はっきりとしゃべらないので何を言っているのかわからない
 ⑦ 基礎教育科目で専門用語をいきなり使う
 ⑧ 授業と関係のない世間話（自分の趣味に関する話）ばかりする
 ⑨ 板書がわかりにくい（筆圧が弱くて薄いため見にくい）
 ⑩ 板書やレジュメの配布、テキストの指定等が無く、しゃべりっぱなし」

後期は、メディア教育開発センターの通信研修「学生による授業評価実践」に参加した。このシステムを利用した場合、メディア教育開発センターが用意した数百のアンケート項目の中から選択したり、講義者が自由に内容を設定したりすることができ、下記の15項目を採用した。さらに、メディア教育開発センターから送られてくるマークシート用紙には十分な余白があり、そこに自由記述のアンケートの回答を書くように求めることもでき非常に重宝した。

- 「 1 熱心に聴講した
2 授業に注意を集中できた
3 私語をしなかった
4 居眠りをしなかった
5 自分で問題意識を持ち、考えようとした
6 テキスト・六法を持参した
7 講義には総合的に満足である
8 講義の目的がはっきり明示されていた
9 講義で利用された教材は有益であった
10 抽象的な概念を分かりやすく提示する工夫があった
11 内容は明快で理解しやすかった
12 よく聞き取れる話し方だった
13 学生の講義を聴く態度は全般的に良かった
14 内容をよく理解できた
15 講義は全体的にみて自分にとって価値があった 」

項目に関して大まかに分類すれば、最初は学生に自己反省をさせ、その後で講義者を評価させることにより、冷静に、言い換えれば第三者的に、評価させようと試みたのである。このアンケート結果に関しては、2・3週間程度で、実数ならびに統計処理されたものが返送された。この統計グラフのおかげで毎回の授業における学生の反応を容易に把握することができ、以降の授業でどのように改善すればよいか参考になった。もちろん、毎回100枚前後のアンケートの統計処理をしてもらえるということが極めて有り難かったことは言うまでもない（文中ではあるが、メディア教育開発センターの関係各位に深く感謝する）。

なお、この結果に関しては、かなり良い評価を得られたが、氏名・学籍番号を記入させたからかもしれないし、あるいは学生が大人の判断をして、低い評価を下せば筆者に対して悪いと思いき高く評価してくれたのかもしれない。氏名および学籍番号の記入については少し迷いがあったため、受講生に挙手させた結果、おおよそ記名2：無記名1であったので全員記入することとした。受講生にすれば、記名してアンケートに答えれば出席したという証拠になると思い込んだのであろうが、授業評価は成績評価に全く利用しなかった。なお、授業開始早々に適当に記入する受講生もいたし、10回目くらいになると面倒だと言う学生も現われるという問題もあった。

さらに、和歌山大学学生部の要請による「基礎教育科目のアンケート調査」も7月と1月に実施した。その中に、それまですべて欠席でありながら「7～10回出席」と記入した学生がいた。これは、毎回小テストやアンケートを実施していたため発見できたのであるが、このような学生もいることを承知の上でアンケートは実施しなければならない。

従って、学生による授業評価は一人よがりにならないという点で極めてメリットが大きく、それゆえ実施すべきと考えるし、それがまた現在の大学改革・教育改革という時流に乗ったやり方でもあろう。大事なことは、その結果を決して鵜呑みにするのではなく、自己の授業改善

の参考資料に使えばよいのである。悪かったからといって落胆する必要も無いし、逆に、良かったからといって喜んでばかりもいられないと考える。

6. 公開授業後の検討会について

最大の問題は、参加者が極めて少なかったことであるが、これについては後述する。

京都大学の公開実験授業の後の検討会では、教授者のコメントの前に、時系列に沿って授業を振り返ったり、授業を受けて強く感じたことをいくつかのポイントに絞って振り返ったりするために、数人のフィールドワーカーの報告がなされる。これは平成8年より毎週月曜日、従って年間で30回近く開催され、それが蓄積されていった結果であり、和歌山大学よりも3年早く着手されており、その経験やノウハウをそのまま移植することはもちろん不可能であり、実際、6月24日の第1回公開授業とその検討会で実施することの大事さを痛感した。

また、検討会の議事録を作成するにあたり、参加者のメモだけで記録することはできず、カセットテープレコーダーやビデオカメラで録音・録画することは極めて重要であった。京都大学の公開実験授業後の検討会ではいつも克明に記録されており、先進校の経験は極めて有意義であると感じた。

そして、90分の公開授業の直後に検討会を実施するため、参加者の集中力・疲労を考えれば、検討会の開催時間は最長で70分程度ではなかろうか。和歌山大学では、それまで検討会の経験も無かったので議論が続かなくなることもあった。

最後に、検討会において、公開授業中の視線の配り方についても指摘を受けた。当初は視線が漂っていたが、慣れるに従いしっかりと受講生を見ていたそうである。講義をした側としては予想もしていなかったことではあるが、参考になる意見であり、授業改善にとって公開授業と検討会の実施は非常に効果的であると感じた。

以下に、検討会で特に目立った質疑応答を披露する。

(問い) 講義案や参観教員用のレジュメ作成の手間は膨大なものではないか。

(回答) 確かに相当時間はかかる。しかし、授業改善のためには必要な努力であるし、一旦作成してパソコンに保存しておけば2回目からの負担はかなり少なくなる。

(問い) 毎回小テストを実施しているそうだが、採点にかかる時間と労力はどうしているのか。

(回答) 時間に関しては、人数にもよるが当初は丸1日かかることもあった。しかし、慣れてくれば誰が良くでき誰が手を抜いているかということも察しがつくこともあるし、回収時にある程度チェックすることもできるので、2か月もすれば多少は楽になる。労力は、一生懸命に受講生が書いていれば、それに応えるのが当然ではなかろうか。

(問い) 公開授業および検討会を開催してどのような意義があるのか。専門の異なる者が参加して果たして有意義であろうか。

(回答) 専門が全く異なる科目であっても、授業のベースになる部分で共通する点は必ず存在し、それに気づくことは極めて重要である。また、公開授業に続く検討会の参加者の存在意義は、授業改善にとって極めて大きいものであるが、専門が同じ者よりも、むしろ異なる者の方がさらに存在価値があるように思われる。すなわち、専門が同じであれば、ややもすれば内容

にとらわれがちとなるのに対して、専門の異なる者の場合であれば、授業の仕方、スキル、プレゼンテーションなどに目が行き届き、広い視野でものを見てくれるからである。従って、公開授業を参観する際、専門が異なるから参考にはならないと考えるべきではなく、むしろより多くの成果が得られると考えて、積極的に参加すべきではないだろうか。

(問い) 授業中の学生の受講態度が非常に良好である。何か特別な工夫をしているのか。

(回答) 普段から注意していることが直接の原因であると思う。というのは、多くの受講生、特に真面目に受けている学生に対しては失礼かもしれないが、ほんの少数ではあるが受講マナーの悪い者もいたので、頃合いを見計らって黒板に次のような警告文を書いたこともあったからである。

「私語をしたい者は出て行け。居眠りしたければ帰って寝ろ。

途中退室するくらいなら初めから来るな。

携帯電話を鳴らすな。室内脱帽、コートも脱げ。

遅刻者は前のドアから入るな。ドアの開閉は静かに。

講義中、飲食禁止。ガムもかむな。飲食物を机上に置くな。

仕方がない場合を除いて、席を立ててウロチョロするな。」

なお、受講態度に問題のある学生は1割程度であり、圧倒的多数は真面目な良い学生である。他の先生方の講義に比較して遙かに優秀であった。受講学生の態度が良ければ、講義者も気持ち良く講義することができ、より良い授業を提供することができる。

7. まとめと今後の課題

公開授業と検討会を開催して自分自身の授業改善に関する収穫は大きかった。

従来から、授業内容については学生のニーズに合った内容になるように、言い換えれば学生が現在・将来必要とする知識を供給するよう努力してきた。また、小テストを通して教授者と受講生との双方向性を確保するようにも努めてきた。しかし、これ以外にも新しく工夫した(せざるを得なかった)ことがある。

すなわち、今回、公開授業のために初めて講義案(教案)を作成したことである。この講義案にも一長一短(マイナスよりもプラスのほうが大きいことは言うまでもない)があつて、長所は、構成のしっかりした授業を自信を持って展開することができることであるが、短所としては、講義案に縛られ過ぎるようになり、学生の理解度に応じて説明を変えろという柔軟さを発揮させにくくなるということをあげることができる。

また、授業評価に対する考え方の転換も極めて大きな収穫であった。すなわち、これまで積極的に賛成・実施することができなかった学生による授業評価を実施し、これに対して肯定的になったことである。メディア教育開発センターの「学生による授業評価実践」に参加し、毎回アンケートを実施し、学生の授業者に対する評価が数字として現れることは、従来主観的な印象に過ぎなかったものが、客観的に数値化されることであつて、授業者の自己反省の大きな材料とすることができ、授業改善を図る上で大いに役立つものである。

さらに、反省点として収穫できたことは授業時間の使い方である。公開授業の際は、小テストを実施せず、レポートを提出させた。これは、参観者に検討会へも参加してもらいたいため

に、授業直後に検討会を実施するべく採用した方策であって、小テストの時間をとれば、検討会の参加者がますます減ると思われた。そのため、ほぼ90分間講義し続けた。この点について、「長過ぎる。注意力散漫になる。何か作業を入れるべき」と現役の高校教員で教育学部の大学院生でもある参観者より指摘された。公開授業の場合であっても小テストを実施した方が良かったかとも思われる。おおよそ、講義60～70分、小テスト30～20分程度が適当かとも思われる。また、同じ理由で検討会の時間も最長で70分程度にすべきではなかろうか。

最後に、今後に残された課題について述べる。

「日々のくらしと法律」は、前期は経済学部夜間主コースを対象として、後期は全学部を対象として、基礎教育科目（教養科目）と位置づけて臨時開講した。そのうち、6月24日・10月21日・11月4日・11月25日・12月9日の5回を公開授業とし、その直後に検討会を開催した。公開授業を検討会における授業改善のための議論のたたき台として提供するためであった。そして、検討会の参加者の中から公開授業をしようという者が現われ、また別の材料を提供する。このプロセスの繰り返しにより、公開授業と検討会の裾野を広げてゆき、「個人の授業改善から大学全体の授業改善へ」ということを企図していた。しかし、参観者はおおむね10～15名で、検討会の参加者は5～8名で、予想よりも極めて少なかった。授業がある、出張である、会議があるなど、さまざまな原因が考えられるが、個人的にたずねたところでは、参加すれば公開授業をしてくれと依頼されるのが怖いという声が結構多かった。大学をあげて授業改善に取り組んでおり、その1つのプログラムとして公開授業・検討会が位置づけられているにもかかわらず、参加者数が少なかった。これらを開催するにあたり学内広報紙・立て看板・電子メール等あらゆる手段を尽くしたつもりであったが、実に残念なことである。従って、横への広がり、すなわち参加者数を増やすことが、今後に残された最大の課題である。